(34)

氏名(生年月日)	王　正一 (オウ　セイ　イチ)
本籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第 256号
学位授与の日付	昭和51年10月15日
学位授与の要件	学位規則第５条第２項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**大腸ファイバースコープの臨床応用** —台湾大学内科 732回検査の経験—
論文審査委員	（主査）教授　滝沢　敬夫
	（副査）教授　遠藤　光夫，教授　渡辺　宏助

論文内容の要旨

研究目的

近年 Colonofiberscope の進歩により大腸疾患の診断は飛躍的に向上した．この結果，全大腸の粘膜の変化が細かく観察できるようになり，また生検組織診断が可能となつた．さらに経内視鏡的 polypectomy が実用化され，開腹という苦痛から患者は開放された．本論文はこのような見地から，この Colonofiberscopy の臨床評価，問題点を約 700回の施行経験から検討した．

研究対象

台湾大学附属病院内科における1971年11月30日から1975年９月19日までの３年10カ月に下部消化管症状を訴える患者を対象とした．検査施行症例数は 570例，施行回数は 732回である．

使用器具

Colonofiberscope は，オリンパス製 CF-LB, $CF\text{-}MB_2$, 光源は，CLE-Ⅲ, CLX, CLXF を使用した．

研究結果

1) Colonofiberscope の深部挿入率は年々向上しているが，最近１年間の回盲部への挿入率は 78.7%に達した．これは Sliding tube の使用により挿入の手技が簡単になつたことによる．

2) 本法による大腸疾患に対する診断能をみると，全例の49.8%は内視鏡によりＸ線検査を中心とした臨床診断を再確認しえた．なお全例の46.3%は臨床診断をあらためた．また診断不能は 3.9%にすぎなかつた．

3) 注腸Ｘ線にて狭窄像を示したものは 131例であるが，そのうち Colonofibeiscopy によつて54例（41.2%）には異常が認められなかつた．

4) 注腸Ｘ線が正常であつた 158例の慢性下痢症に対して行なつた Colonofiberscopy により30例（19%）に器質的疾患が認められた．

5) 下部消化管の出血症例は 157例で，このうち 109例は出血源が不明であつたが，Colonofiberscopy によつて90例（88%）の原因が判定できた．出血例の出血源は結腸癌45例，ポリープ33例，潰瘍性大腸炎17例の順であつた．

6) 緊急大腸鏡検査は，19例に施行し，全例の出血部位を確認しえた．

7) 内視鏡で発見した大腸ポリープは83例，施行例の14.7%であつた．部位別では，127個中66個（52%）がＳ状結腸と直腸に存在した．

8) Polypectomy の目的は大腸ポリープ完全生検と治療（止血）である．この Polypectomy は37例40個に施行された．そのうち Polypoid cancer １例，adenoma with malignant change ６例であつた．偶発症は経験していない．

9) 大腸悪性疾患82例中原発性大腸癌は75例，そのうち早期癌５例，早期癌と進行癌の併存が７例あつた．その他 malignant lymphoma ２例（lymphosarcoma １例と Hodgkin's disease １例）と白血病の大腸粘膜浸潤が１例あつた．

10) 炎症性疾患69例中，潰瘍性大腸炎24例，Crohn 病９例，アメーバ赤痢５例，放射線直腸炎５例，腸結核４例などであつた．以上の疾患は内視鏡的鑑別診断が可能

であつた．

11）潰瘍性大腸炎24例中，14例半年以上の follow up をおこなつた．そのうち progressive 4例，stationary 4例，regressive 6例であつた．

12）内視鏡検査により multiple lesious を発見できた症例が53例あつた．そのうち，注腸X線内視鏡の両者ともに多発性病変を認めたもの6例，内視鏡検査でさらに病巣の1個を確認し追加したもの26例，X線で病巣が不明であつたが内視鏡で多発性病変を発見できたものが18例であつた．

13） 732回検査中，偶発症は1例でS状結腸穿孔であつた．

14）小児（6～14歳）の Colonofiberscopy は，5例8回に施行している．そのうち，1例に出血が確認され，緊急にて Polypectomy を施行した．5例中4例は，回盲部まで挿入している．

結　論

以上の事実から，Colonofiberscopy 臨床上きわめて有用であるが，スコープや手技の改良により，理想的深部挿入率へ達することが期待される．また，大腸病変の微細観察と機能面への応用が，今後の目標と考えた．

論 文 審 査 の 要 旨

著者は極めて多数の症例について大腸ファィバースコープ検査を行ない，数々の新らしい知見をえたうえで，大腸病変の診断に内視鏡検査が不可欠であること，ならびに種々の大腸疾患における内視鏡検査の診断的意義を明確にした．学術上価値ある論文と認める．

主論文公表誌

大腸ファイバースコープの臨床応用
—台湾大学内科 732回検査の経験—
Gastroerological Endoscopy Vol 18 (3) p. 396～ 419 (June 20. 1976)
日本消化器内視鏡学会雑誌 18巻 3号 396～ 419頁（昭和51年6月20日）

副論文公表誌

1） 胃カメラ術に対する患者の反応について．(Patient's responses to geatrocamera photography)
台湾医学会雑誌 72 (3) 119～ 128 (1973)

2） 術後残胃の内視鏡的観察．(Intragastric photography in the pcstgestreetomy patients)
台湾医学会雑誌 72 (5) 249～ 261 (1973)

3） 大腸良性病変の内視鏡学的研究．(Endoscopic study on ron-malignant lesions of colcn)
Proceedings of 1st Asian-Paific congress of Endoscopy, Inter Group Corp, Osaka. 157～158 (1973)

4） 上部消化管出血に対する緊急内視鏡検査．(Early endoscopic diapnosis of apper gastrointestinal bleeding)
Proceedings of 1st Asian-Parific Congressof Endoscopy, Irten Group Corp, Osaka, 92～94 (1973)

5） 台湾における無黄疸性肝炎の研究．(Study on anicteric hepatitis in Taiwan)
Proceedings of the National Science Council 6 51～56 (1973)

6） HB抗原carrierに関する研究．(Studies on carriers of hepatitis B antigen)
Proceedings of the Intenational symposiuna on hepatitis in Taipei 85～91 (1974)